

日韓新時代共同研究プロジェクト 日韓両国政府へ報告書提出

日韓新時代共同研究プロジェクト(日本側委員長:小此木政夫慶應義塾大学教授、韓国側委員長:河英善ソウル大学校教授)は、2010年10月22日(金)に報告書「『日韓新時代』のための提言—共生のための複合ネットワーク構築—」を両国政府に提出し、インターネットで公開しました。

本プロジェクトは2008年4月の日韓首脳会談での合意を受けて、2009年2月に発足しました。「国際社会に共に貢献していく日韓関係」をテーマに、日韓の研究者26名が「現在及びこれからの日韓関係」「国際政治」「国際経済」の3つの分科委員会に分かれ、約1年半の間共同研究を行い、その間研究発表や意見交換を重ねてきました。

30ページにわたる報告書の冒頭で、東アジア及び世界の平和と繁栄の推進をはかる日韓関係の未来像として「日韓共生のための複合ネットワーク」を提唱し、その実現のために3分野で21個の課題を「日韓新時代アジェンダ21」にまとめました。

両委員長による共同記者会見(22日(金)、韓国外交通商部)で、河英善韓国側委員長は、「『共生のための複合ネットワーク』とは、伝統的な国益や国家間競争と、未来的な共同体の架け橋となる、日韓両国関係の基本的な枠組み。そこから、韓国と日本の関係が二国間関係にとどまるのではなく、新しい東アジアや世界のために貢献する道を見出せるのではないかと述べました。また、小此木政夫日本側委員長は、「類似した社

会条件と政治経済体制を持つ日韓両国の今後の国づくりにあたり、共通の目標や価値を生むにふさわしいものとして、『共生のための複合ネットワーク』を想定した。この報告書では、政治、経済、文化・人的交流面などでの関係の緊密化を提言している」と述べました。23日(土)には、ソウル市内でプロジェクトの最終会合が行われ、各委員は共同研究を振り返り、プロジェクトの意義などについて所感を述べあいました。

この報告書は、外務省、日韓文化交流基金ウェブサイトで全文をご覧になれます。



両国委員長記者会見(韓国外交通商部)

委員会メンバー

	日本側	韓国側
委員長	小此木政夫(慶應義塾大学法学部 教授)	河英善(ソウル大学校外交学科 教授)
現在及びこれからの日韓関係	添谷芳秀(慶應義塾大学法学部 教授) 平岩俊司(関西学院大学国際学部 教授) 小針進(静岡県立大学国際関係学部 教授) 西野純也(慶應義塾大学法学部 准教授)	金浩燮(中央大学校国際関係学科 教授) 李元徳(国民大学校国際学部 教授) 朴喆熙(ソウル大学校国際大学院 副教授) 朴栄濬(国防大学校安保大学院 副教授)
国際政治	中西寛(京都大学大学院法学研究科 教授) 田中明彦(東京大学大学院情報学環 教授) 村田晃嗣(同志社大学大学院法学研究科 教授) 田所昌幸(慶應義塾大学法学部 教授)	李淑鍾(成均館大学校国政管理大学院行政学科 教授) 全在晟(ソウル大学校外交学科 副教授) 尹徳敏(外交安保研究院 教授) 文興鎬(漢陽大学校国際学大学院中国学科 教授)
国際経済	深川由起子(早稲田大学政治経済学術院 教授) 小川英治(一橋大学大学院商学研究科 教授) 木村福成(慶應義塾大学経済学部 教授) 澤田康幸(東京大学大学院経済学研究科 准教授)	鄭永祿(ソウル大学校国際大学院 教授) 孫冽(延世大学校国際大学院 教授) 金基石(江原大学校政治外交学科 教授) 金良姫(対外経済政策研究院 研究委員)

【報告書「基本構想」より】

1. 「日韓新時代」の到来

「……日韓新時代とは、両国が緊密な協力を通じて共生のための複合ネットワークを構築していく時代である。日韓両国は、時間的には、過去に対する共通認識を持つべく引き続き努力するとともに、現在の緊密な協力関係をさらに発展させ未来を共同設計するために、過去、現在、未来を有機的かつ連続的に理解しなければならない。……両国の相手国に対する相互評価及び相互尊重の精神は、新時代日韓関係の強固な土台になる。日韓両国は、民主主義、市場経済、法の支配、人権を追求すべき崇高な価値として共有している。また、2008年の世界的な金融危機の経験を背景に、公平、分配、環境、福祉等のポスト産業化社会の価値を統合する新たな秩序や制度を、国内及び国際的レベルで実現させるという共通の課題を抱えている。」

2. 日韓関係100年の省察

「……日韓関係は植民・被植民関係という不幸な歴史を経験したが、緊密な政治経済協力を通じて対等なパートナーに発展した世界史的にも稀な二国間関係である。冷戦終結以降、頻繁に起きた歴史摩擦は、過去回帰的なパラダイムから脱却しつつあるものの、依然として未来志向的なパラダイムが構築されないという過渡期の日韓関係を象徴する現象だと言える。そのような混乱を直ちに解消することは困難だが、両国政府と国民が協力して冷静に対応することによって問題の解消を図り、東アジア地域及び世界の平和と繁栄を推進するための努力を払わなければならない。」

3. 日韓共生のための複合ネットワークの構築

「日韓共生のための複合ネットワークとは、日韓両国の政府、地方自治体、教育機関、企業、NGOなどの多様なアクターが、政治、安保、経済、文化、情報知識、科学技術、環境生態等すべての領域において緊密な協調と協力のネットワークを構築し、日韓両国はもちろん、東アジア及び世界の平和と繁栄の推進を図る日韓関係の未来像である。複合ネットワークが構築されれば、政治の領域では、摩擦や対立よりも対話と協力が優先され、東アジアの平和と繁栄のためだけでなく、世界的にも貢献できる日韓協調が画期的に進展するだろう。……」

4. 日韓関係の未来構想

「……冷戦的思考や脱冷戦的思考を超えた、新時代の複合的思考が必要である。日韓両国が東アジアの平和と繁栄のために共同して複合ネットワークを構築することは、21世紀における日韓共生のための戦略的選択であると言える。……複合ネットワークの構築は……日韓米の協力関係を一層強化させるであろう。……日韓中三国協力の枠組みは、日韓複合ネットワークの構築に必要な不可欠な要素である。……日韓両国は……北朝鮮問題の解決のために緊密に協力するだけでなく、さらに一歩進んで東アジアの新たな国際秩序形成に北朝鮮を参加させるために積極的に努力すべきである。」

5. 「日韓新時代共同宣言」の採択

「韓国併合100年の歴史的な節目の年を迎え、日韓両首脳は早い時期に会談し、不幸な過去の歴史を直視しつつ、新時代における日韓関係の発展の方向を包括的に提示する「日韓新時代共同宣言」を採択することが望ましい。……」

【日韓新時代アジェンダ21】

<日韓関係>

歴史和解努力
ハイ・レベル対話の活性化
交流ネットワークの多層化
キャンパス・アジア実現
東アジア知識銀行
マルチメディア協力
海底トンネル推進

<国際政治>

共生複合ネットワーク強化
対北朝鮮政策協調
安全保障協力の強化
新アジア秩序共同構築
世界的な安全保障協力
エネルギー環境協力
グローバルガバナンス協力

<国際経済>

共生・繁栄ネットワーク構築研究
包括的FTA締結
金融秩序安定化協力
金融秩序長期発展協力
情報通信協力
開発協力
環境事業の機会拡大

報告書はこちらでご覧になれます。

外務省「日韓新時代共同研究プロジェクト」

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/korea/newera/index.html>

日韓文化交流基金「日韓新時代共同研究プロジェクト」

<http://www.jkcf.or.jp/kaigi/newera>

2010年度のシリーズ講演会第2回は、釜山ビエンナーレ2010の芸術監督を務めたインディペンデント・キュレーターの東谷隆司さんをお招きし、展覧会のコンセプトや釜山でのエピソードをお話いただきました(2010年11月5日(金)、日韓文化交流基金会議室)。

韓国の国際展初の日本人芸術監督

「ビエンナーレ」とは、2年に一度開かれる美術の国際展といった意味合いで使われている言葉です。日本では3年に1度の「トリエンナーレ」の方が多くでしょうか。韓国では国際展の企画者を「芸術監督」と呼び、それが私の「釜山ビエンナーレ2010」(2010年9~12月)における役割です。韓国では、1995年に始まった「光州ビエンナーレ」がアジアの先駆けとなり、2000年に「メディアシティ・ソウル」、2002年には「釜山ビエンナーレ」が始まりました。それら以外にも無数のビエンナーレやトリエンナーレが渦巻いているのが、今の韓国の状況です。

釜山ビエンナーレの起源は1980年代に釜山在住作家が自主的に始めた海岸での野外展で、その背景にはソウル中心の美術界から疎外された釜山の作家たちの苛立ちがありました。それらの展覧会は2000年に行政の後押しを受けて「PICAF(釜山国際現代美術祭)」に包括され、2002年に「釜山ビエンナーレ」になります。前回までの釜山ビエンナーレは、メイン会場の市立美術館で現代美術展、屋外の「彫刻プロジェクト」、海岸を使った「海の美術祭」の三部門で構成されていました。

私が釜山ビエンナーレ2008でゲストキュレーターを務めたのは、親しい友人の韓国のアート関係者が、大学の後輩であるビエンナーレの監督に私を推薦してくれたのがきっかけ



リサーチ中に、作家チャ・キユルと彼の作品の前で

でした。担当した日本の作家ともども妥協せずにやりあっていたのが功を奏したのか、日本の作家の展示が展覧会の顔となるような好評を博しました。そんなことがあって、釜山ビエンナーレ2010監督の候補者百数十人のうち、私が唯一の外国人でした。釜山では外国人監督を迎えた経験が



なく、さらに韓国と日本のこれまでの関係を考えれば本当に日本人で大丈夫かと思っていたので、選ばれた時は正直驚きました。

「釜山人」になる —釜山のローカルに根ざして

私が監督として最初にやったことは、今まで三つの部門に分かれていた展覧会を一本化したことでした。前回の経験で、三部門がどれも均質化し分かりづらいついていたので、設置場所は作品本位で決めることにし、展覧会を一つにまとめました。ところが、釜山での作家リサーチ中に「海の美術祭をなくすのはまずい」とさんざん聞かされ、はじめてその前身を知りました。海岸での海の美術祭は釜山の作家たちのアイデンティティであり、市民にも親しまれていたため、その名称をなくすことには大きな反発がありました。

もう一つ今回大きく違う点は、これまでソウルにあった展示チームの事務所を釜山に移したことでした。スタッフの中心はソウルで別の仕事を持っているキュレーターや評論家で、展覧会の2か月前からオープン直後までしか釜山におらず、地元作家の調査も行っていませんでした。もともと地元作家主導で始まった展覧会が、大きくなったと同時に作家たちの思いとは乖離してしまっただけです。しかし、今回は最初のリサーチやスタッフ集めだけはソウルで少数精鋭のスタッフで始め、展覧会オープンの11か月前の2009年10月に全スタッフが釜山に移りました。私は海外でのリサーチ以外はほぼ釜山に住み、オープン後も釜山に残って展覧会に手を入れ続けました。

釜山側の準備や説明の不足はあったものの、翻って考えれば、外国人だから招かれようなんて魂胆が甘かった(笑)。これは、「お前は釜山人になれ」ということだ、と思いました。ビエンナーレの成り立ちを調べ、地元の作家たちとも話し合う中で、光州ビエンナーレのような国際的な位置をめざすより、釜山のローカルに根ざすべきであると考え、それが展覧会の一つのコンセプトになりました。だから、地元の作家の感情を考え、釜山で美術関係の雇用の機会を増やすためにも、事務

所は釜山にあるべきだし、監督は釜山に住むべきだと考えました。それはやはり効果があって、監督が釜山にいることが釜山の作家に有利に働くと思ったので、彼らが制作で悩めばすぐに会い、全面的にバックアップしました。

今回の参加作家72人のうち韓国人は20人くらい、その7割以上が釜山出身です。地元の作家のリサーチには、釜山でアールスペースを運営しているアーティストをゲストキュレーターに迎え、彼の協力で多くの作家に会いました。結果的に、学閥や地の利などに恵まれただけでこれまで注目されなかった優れた韓国の作家に光を当てる機会になったと思います。

個人の生と人類の知的進化

今回のビエンナーレでは、「Living in Evolution (進化の中の生)」というテーマを掲げました。私たち人間は、個々の人生と、長い人類全般の歴史という二つの時間軸を同時に生きています。個人が人生を捧げて作った芸術作品が彼の生きている間は評価されなくても、長い人類の歴史から見れば、未来の価値に影響を及ぼし、人類の知的進化に貢献することもあります。芸術家をはじめ新しいものを作る人々は、創造の中で人類の進化に自分が埋没し一体化していくような一種のスリルやエクスタシーを経験的に知っています。

しかし、人類レベルの知的な進化が個人の生に善なるものとは限りません。資本主義の発達やグローバリズムの発展が弱い民族や個人を抑圧する面もあります。人類の進化に寄与する創造を行った天才たちが、個人の人生では不幸な結末を迎えることもあるように、芸術家が創造の中で感じるスリルには、埋没しすぎると命に関わる危険な一面もあると思います。今回のテーマでは、個人の人生と大きな人類としての流れを対比したときのそうしたパラドックスが重要なキーになっています。

実際の展覧会では、個人の生と進化をいくつかの切り口で取り上げています。展覧会の構造をシンプルにすることと、テーマ性を強くすること、それから作品相互の連関を強くすることを意識しました。例えば、Dinh Q. LE (ベトナム) の作品は、ベトナムの若い農民が農業用ヘリコプターをアメリカから買わずに自力で開発するドキュメンタリー映像に、ベトナム戦争のヘリコプターが出てくるスペクタクルなシーンが挟み込まれているものです。同じ部屋には、ホロコーストの生き残りである母親が歩いた道のりを写真撮影しながら歩くことで、その衝撃を乗り越えるというプロジェクトを行ったYishay GARBASZ (イスラエル) の作品も展示されています。この作品の流れでは、悪しき記憶ではない平和利用のためのヘリコプターとホロコーストの記憶の浄化を通して、一種の進化としての忘却を表しています。



釜山ビエンナーレ2010展示風景

Dinh Q. LE *The Farmers and The Helicopters* (2006)

Three-channel video projection, helicopter
DVD, colors, sound duration: 15min

ポスト・ビエンナーレ時代の ビエンナーレへ

私の監督就任は、釜山初の外国人監督がスターキュレーターではなく、国際的には無名の日本人だったという点で、象徴的なことだと考えています。観客動員が見込めない現代美術系の展覧会は現在予算が削られつつあり、将来的には国際展以外に同時代の美術を見られる場がなくなるかもしれません。ただ、国際展から祝祭性がなくなり、経験値が浅い若手に監督のチャンスがめぐってくることから、新鮮な展覧会が生まれる可能性もあります。そのためには、乏しい予算の中で強いテーマ性を打ち出し、差別化を図っていく必要があります。日本の国際展はまだ祝祭色が強いのですが、釜山をはじめ韓国では既に祝祭の時期は過ぎ、「ポスト・ビエンナーレ時代のビエンナーレ」段階に入っているといえるでしょう。

GDP (国内総生産) では日本は韓国よりも上ですが、最近のニュースによれば、国家予算に占める文化予算のパーセンテージが日本は0.12%なのに対し、韓国は0.73%で世界的にかなり高水準です。釜山という比較的のんびりした場所でも文化的には刺激的で、市民も新しいものに貪欲に触れようとビエンナーレに家族連れでやってきます。今回の監督の経験をきっかけに、文化の「韓国モデル」を研究し、今後のヒントにしていければと思っています。

PROFILE 東谷隆司

あずまや たかし

1968年生まれ。東京藝術大学大学院修士課程修了。世田谷美術館学芸員として、パフォーマンス・アーツ、音楽、映像などのイベントを手がける。その後、東京オペラシティアートギャラリー、横浜トリエンナーレ2001にかかわり、メディア・アーツ・ソウル2002でコミッショナーを務める。森美術館勤務後、釜山ビエンナーレ2008にゲストキュレーターとして参加。主な企画展に「GUNDAM—来たるべき未来のために—」(サントリーミュージアム、上野の森美術館ほか巡回)など。

植民地朝鮮のモダニズム文学を問う

2010年は日韓併合から100年目にあたる年だったが、韓国文学に関していえば、植民地時代のモダニズム詩人・李箱の生誕100周年を記念する年だったこともあり、韓国・日本の内外で関連の学術行事が数多く開催された。武蔵大学総合研究所、および韓国の李箱文学会、延世大学校BK21韓国言語・文学・文化国際人力養成事業団が主催した「日韓文学交流の現在・過去・未来—李箱生誕100周年記念国際学術シンポジウム」（日韓文化交流基金・助成）も、そのような学術行事の1つである。

李箱関連の学会を日本でやるのは、この奇抜な詩人が植民地時代の1937年に東京で死んでいることとも関係がある。評論「東京で死んだ男——モダニスト李箱の詩」（川村湊）以来、日本でも少しずつ紹介されてきた詩人だが、2006年に崔眞碩チェジンソクによる翻訳選集が作品社から刊行されたこともあり、このところ日本の文学研究でも李箱に対する言及がよく見られるようになった。

内外の研究者が新解釈を披露

このシンポジウムが、詩人が道なかばにして倒れた東京で、日本や韓国をはじめとする海外の研究者がつどって盛大におこなわれたのは、日本をはじめとする海外で李箱研究がこのように本格化していることと無縁ではないだろう。2010年7月16日（金）・17日（土）と2日間にわたって、東京の武蔵大学を会場としておこなわれたこのシンポジウムでは、1日目の国際ワークショップで韓国文学を専攻する日本や韓国、アメリカ、カナダの研究者や大学院生らが日頃の成果を発表、今後の韓国文学研究を担う世代らによって、主として植民地時代の文学・文化に対する緻密な分析が披露された。2日目の「李箱生誕100周年記念国際学術シンポジウム」では、日本・韓国における李箱研究の一線の研究者らがつどい、詩人・李箱が残した文学作品の意義を問い、その問題性を検討した。



基調講演をおこなう金允植ソウル大名誉教授

2日目のシンポジウムで午前の部に基調講演をおこなった金允植キム・ユン植氏（ソウル大名誉教授）は「私がのぞいた李箱文学の深淵—生誕100周年に寄せて」で、韓国でこれまでに数回にわたって刊行さ

れた李箱の全集の特徴に触れながら、未公開資料の存在の可能性や、李箱研究者らのあいだでつねに話題となる肉筆原稿の問題性について言及し、今後の李箱研究の展望について力

のこもった議論を展開した。また、坪井秀人（名古屋大）「コキユ文学の中の李箱——モダニティ批判の可能性」や李京燦（延世大）「李箱、20世紀のスポーツマン」など、日本や韓国の近代文学研究でめざましい研究成果を日々量産している両氏による李箱解釈の最前線が披露され、John Frankl氏（延世大）の「Marking Territory」では、日頃あまり多く言及されることのない李箱のエッセイ「山村余情」のエクリチュールの境界性が指摘されたりするなど、総じて李箱研究の過去・現在・未来を問う総合的な学術行事となった。



国境を越えた研究の可能性を提示

これらの国際シンポジウムおよび国際ワークショップを通じて、文学・文化の生成を複数の要素から動的に考える文学・文化研究への創造的変換が提唱されたものとする。多面的文化の激しい接触のなかで変動する21世紀の社会的確に捉えるために、文学・文化研究を、異なる複数文化の接触・交差・軋轢を国家・地域横断的に捉える知をめざすものへと作り変える、その試金石となる作業が試みられたといえよう。李箱研究はともするとモダニズム文学研究という狭い枠のなかで、難解な言語でおこなわれることが多かったが、昨今、脱領域的な研究が数多く登場することによって、これまで韓国文学研究者の間でのみおこなわれていた研究が、より深みと幅を増しながら、その質を上げている。そのような成果が、今回のシンポジウムにも十分に示され、両国の研究者の間でこれまでになく内容のある議論がかわされ、国境を越えた文学・文化研究の今後の方向性を展望しながら、李箱研究の歴史に残る報告成果を分かち合う結果となったといえるだろう。

PROFILE 渡辺直紀

わたなべ なおき

武蔵大学人文学部准教授。1965年東京生まれ。慶應義塾大学法学部卒、東国大学大学院国文科博士課程修了。専攻は韓国・朝鮮の文学。2005年から現職。主著に『戦争する臣民、植民地の国民文化』（韓国語・共編）、『韓国の近現代文学』（共訳）など。



私たちが開催している「日韓次世代映画祭」は、大分県の温泉と日韓次世代の熱気が融合した映画祭です。ここでは2010年度に日韓文化交流基金から助成していただいた「第1回長湯温泉∞日韓短編映画祭」(2010年11月)を中心に、その活動を報告しましょう。

「日韓短編映画祭」は、別府で行っている「日韓次世代交流映画祭」が母体になって生まれました。大分での日韓映画祭の始まりは、2007年の出来事にさかのぼります。

「イム・グオンテク監督の映画祭を開いてくれませんか」

友人のチャン・ジェグク東西大学副総長から、こんな依頼を受けました。東西大学に韓国映画界を代表するイム監督の名前を冠した映画学部が誕生したのです。監督は以前から知っていました。名作「風の丘を越えて」(西便制)が韓国で公開されたとき、毎日新聞ソウル特派員だった私は、いち早く映画評を日本に送ったことがあります。

「シバジ」の女優カン・スヨンさんも旧知の仲でした。映画祭の話はとんとん拍子に進みました。工夫したのが映画祭の名称です。「イム・グオンテク映画祭では1回きりで終わってしまう」。そんな僕の悩みに、名回答を与えたのはチャン副総長でした。「次世代交流という言葉を入れたら」。チャンさん自身が取り組んできたテーマでした。

映画祭の1回目は、日韓文化交流基金の助成を得て08年11月に行われました。大盛況でした。2回目は09年12月に開きました。特別ゲストが国民俳優アン・ソンギさん。イ・ミヨンセ監督、女優パク・チュンフンさんも来日されました。韓国映画評論家協会の全面協力が実現し、09年度同協会賞監督賞を受賞したキム・ヨンファ監督、主演男優賞のイ・ボムスさんにも、来ていただけました。

小さな温泉街で、中身の濃い映画祭

日韓文化交流基金から助成を受けて、「日韓共同未来プロジェクト」として取り組んだのが、今回の「第1回長湯温泉∞日韓短編映画祭」です。

長湯温泉は大分県竹田市にある小さな温泉街です。「日本一の炭酸温泉」として有名なのですが、大分市から車で約1時間もかかるという不便な場所にあり、なかなか全国的な知名度を得るまでになっていませんでした。しかし、ごんまりとした短編映画祭を開くには格好の場所でした。農協の元コメ倉庫(収容人員約150人)を上映会場に利用し、内容の濃い映画祭になりました。全国で初めての「日韓短編映画祭」が生まれたのです。

名前の通り、日韓の短編映画だけの映画祭です。韓国だけでなく、日本の若手監督ら数人もゲストに呼びました。韓国側からはソウル芸術大の学生作品、日本側からは九州龍谷短大

(佐賀県鳥栖市)の学生作品なども上映しました。こうして別府の映画祭とは色合いが異なる、独立した「日韓短編映画祭」が誕生したのです。

運営の中心は短大生や韓国人留学生

地元竹田市の温泉街や行政など、たくさんの人の協力のおかげで、映画祭は完成しました。特別ゲストの俳優イ・ミンギさんのファンの方々からは、次々と学生スタッフに差し入れが届き、朝鮮



学生監督にインタビューする筆者
(日韓短編映画祭)

日報東京特派員も取材に訪れました。別府から始まった映画祭が、どんどん広がってきている証拠だと思います。映画祭の運営はここでも別府と同様に、短大生や大学生たち約50人が中心になっています。司会、上映、通訳、ゲスト対応など多くの仕事があります。別府・大分には韓国からの留学生も多く、「日韓映画祭」を開くにはベストの環境なのです。昨年末、NPO「日韓次世代交流映画祭」も発足し、組織力もついてきました。

第3回「別府八湯∞日韓次世代映画祭」(4月15日から3日間)の特別ゲストには、「映画は映画だ」「義兄弟」のチャン・フン監督、同監督の次回作「高地戦」に主演する人気俳優コスさん、1970年代からの元老俳優シン・ヨンギンさんらが決まりました。今回も楽しくて有意義な映画祭を目指します。多くの方々に、ご観覧いただけたら幸いです。



日韓短編映画祭であいさつする俳優イ・ミンギ(中央)

PROFILE 下川正晴

しもかわまさはる

1949年鹿児島県生まれ。NPO法人「日韓次世代交流映画祭」代表。韓国外国語大学言論情報学部客員教授を経て、07年から大分県立芸術文化短期大学教授(メディア論、韓国研究)。元毎日新聞ソウル、バンコク支局長、編集委員、論説委員。

1 青少年交流事業

訪日団

団体名	団 長	計	男	女	期 間	主な訪問先
韓国大学生 (第1団)	趙顕龍(チョ・ヒョンヨン) 慶熙大学校国際教育院副教授	30	16	14	9/28~10/7	明治学院大学 宮崎公立大学
韓国大学生 (第2団)	卞鍾國(ピョン・ジョングック) 嶺南大学校経営学部教授	29	18	11	9/28~10/7	東京都市大学 東北大学
韓国大学生 (第3団)	林采成(イム・チェソン) ソウル教育大学校科学教育科教授	30	8	22	11/2~11	青山学院大学 松山大学
韓国大学生 (第4団)	李宗炯(イ・ジョンヒョン) 建陽大学校病院管理学科教授	30	13	17	11/2~11	東京工業大学 北海道大学
韓国大学生 (外務省招聘)	鄭絢旨(チョン・ヒョンジ) 外交通商部文化交流協力課	30	8	22	11/23~12/2	山梨市・笛吹市(体験学習) 立教大学

団体名	団 長	計 ※1	男 ※2	女 ※2	期 間	主な訪問先
韓国高校生 (第3団)	丁仁燮(チョン・インソプ) 全羅北道教育庁奨学官	54	20	30	10/28~11/3	鹿児島第一高等学校
韓国高校生 (第4団)	朴虎男(パク・ホナム) 国立国際教育院研究士	53	16	33	10/28~11/3	和歌山県立田辺高等学校

※1 引率含む ※2 生徒のみ

訪韓団

団体名	団 長	計	男	女	期 間	主な訪問先
大学生 (外交通商部招聘)	大野郁彦 外務省アジア大洋州局 北東アジア課日韓交流室長	29	14	15	11/9~18	高麗大学校 韓国外国語大学校
日本教員 (第2団)	竹内新 文部科学省初等中等教育局 教職員課専門官/現職教育係長	20	13	7	11/16~25	泳薫初等学校(ソウル) 建陽大学校 建陽中学校(論山) 論山大建高等学校

団体名	団 長	計 ※1	男 ※2	女 ※2	期 間	主な訪問先
茨城県 中学生	菊地稔 小美玉市立玉里中学校校長	56	20	30	10/3~9	新明中学校(ソウル)
山梨県 高校生	佐野純一 山梨県立身延高等学校校長	54	13	37	10/17~23	紫雲高等学校(ソウル)
神奈川県 高校生	北村公一 神奈川県高校教育指導課長	53	8	41	11/21~27	盤浦高等学校(ソウル)

※1 引率含む ※2 生徒のみ

2 若手マスコミ関係者招聘

10月2日(土)「日韓交流おまつり2010 in Tokyo」に合わせて、9月27日(月)から7日間、韓国のマスコミ関係者5名を招聘しました。一行は「おまつり」関係者へのインタビューや、政府関係者、国内の韓国研究者との懇談等のほか、文化施設、演劇の見学等をおこないました。10月1日(金)の「おまつり」前夜祭と2日(土)の「おまつり」での取材内容は、韓国のテレビと日刊紙で報道されました。



権景福(クワン・キョンボツ) 朝鮮日報記者
文恵湏(ムン・ヘジョン) 韓国経済新聞記者
李承哲(イ・スン Chol) KBS記者
金城漢(キム・ソンハン) KBS記者
金俊佑(キム・ジュヌ) KBS撮影記者

ソウルの「おまつり」に参加する
「2010ミス日本」ミスきもの取材

3 「日韓交流おまつり2010 in Seoul」関連事業



10月2日(土)と3日(日)の2日間にわたってソウルで開催された「日韓交流おまつり2010 in Seoul」に関連して、「おまつり」への参加を通じた両国高校生同士の交流プログラムである「日韓交流おまつり高校生交流プロジェクト」を実施しました。

- 日韓交流高校生公演(和太鼓や箏曲の披露)
(東京都立飛鳥高等学校・海成国際コンベンション高等学校(ソウル))

このほか、「おまつり」の参加団体として、次の団体を派遣しました。

- 青森ねぶた踊り(青森空港国際化促進協議会)
- 盛岡さんさ踊り(盛岡さんさ踊り実行委員会)
- 「2010ミス日本」ミス着物

5 アジア国際子ども映画祭参加訪日団

アジア国際子ども映画祭(12月4日(土)、大分県指宿市)の参加者として、韓国から中高生のグループ(高校生8名、中学生2名、引率2名)を12月1日(水)より7日間招聘しました。この映画祭は、児童・生徒が制作した映像作品の上映とコンテストを行うもので、国内に加え海外10の国と地域が参加しました。一行は、映画祭への参加に加え、早稲田大学川口芸術学校(埼玉県川口市)と鹿児島県立薩南工業高等学校の訪問や、鹿児島県内でのホームステイ体験などをおこないました。

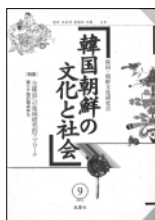
7 学術定期刊行物助成

人文社会科学分野の学会・研究会の研究成果として刊行される学術定期刊行物を支援する事業です。2010年度助成対象の団体より、右の図書が刊行されました。

8 報告書

以下の報告書が完成しました。

- 日本大学生訪韓研修団(2009年度第1団、2010/3/2~11)
- 日韓青少年共同ボランティア活動事業訪韓プログラム(2010/3/23~29)
- 茨城県中学生訪韓研修団感想文集(2010/10/3~10/9)



『韓国朝鮮の文化と社会9』(写真左)
(韓国・朝鮮文化研究会編、風響社)
『現代韓国朝鮮研究 第10号』(写真右)
(現代韓国朝鮮学会編、中西印刷株式会社)

9 韓日文化交流基金訪日団

10月28日(木)に鮫島会長の主催で韓日文化交流基金「Vision2045」関係者歓迎晩餐会を開催しました(ホテルオークラ東京)。

●韓国側参加者

(韓日文化交流基金関係者)

- | | |
|-----------------|----------------------|
| 金在淳(キム・ジェスン) | 元国会議長 |
| 李洪九(イ・ホング) | 韓日文化交流基金会長、元国務総理 |
| 崔秉烈(チェ・ビョンヨル) | 韓日文化交流基金理事、元ハンナラ党代表 |
| 李相禹(イ・サンウ) | 韓日文化交流基金理事長、前翰林大学校総長 |
| 金大中(キム・デジュン) | 朝鮮日報顧問 |
| 金秀雄(キム・スウン) | 韓日文化交流基金常任理事・事務局長 |
| (駐日韓国大使館) | |
| 権哲賢(クワン・チョルヒョン) | 駐日韓国大使 |

4 日中韓青少年(スポーツ)交流訪日研修団

10月27日(水)より5日間、日中韓青少年(スポーツ)交流訪日団15名(韓国・忠清南道の高校生12名、引率3名)を招聘しました。一行は奈良県で日中韓3か国の高校生によるスポーツ交流会(ソフトバレーボール、バドミントン)に参加し、ホームステイをおこないました。



6 第10回日韓歴史家会議

10月29日(金)から31日(日)の3日間、東京で第10回歴史家会議「歴史を裁く」ことの意味」が開催され、「植民地支配責任論と歴史認識」、「史料・文化財はだれのものか—史料公開・文化財返還の問題」、「歴史教育における戦争・植民地支配」の3つのセッションと総合討論に日韓の31名の研究者が参加しました。

29日には講演会「歴史家の誕生」が日本学術会議で開催され、深谷克己早稲田大学名誉教授と崔文衡(チェ・ムニョン)漢陽大学校名誉教授による講演をおこないました。

10 維持会員

10月1日~12月31日の期間に、個人会員14名の方に維持会員制度にご加入いただき、14万円の会費収入となりました。皆さまのご厚意に深く感謝申し上げます(五十音順、敬称略)。

個人

- | | | | | |
|------|------|-------|------|------|
| 青野正明 | 石川捷治 | 伊集院明夫 | 磯崎典世 | 市吉則浩 |
| 林在圭 | 黒柳慶子 | 徐正基 | 徐賢燮 | 中塚明 |
| 平岩定法 | 守重知量 | 山口晃 | 渡邊武 | |